

日本産菌株を用いたアミガサタケ栽培技術の開発

(7) 共同研究試験地（洋野町）での栽培試験

1 はじめに

アミガサタケ(広義)は高級な食用きのこであり、中国の雲南省等で商業的に栽培されている。林業技術センター(林技セ)でも国産菌株の子実体発生を確認したが(成果速報No.365; 372; 384; 385)、将来的な産地化には栽培地の確保が必要である。そこで、気象条件がアミガサタケの栽培に適するとされた地域*の民間企業と共同で、露地栽培試験を行った。

*:雲南省研究者からの助言

2 材料と方法

(1) 供試菌株

国内から収集したアミガサタケ菌株のうち、黒色アミガサタケMel21種*の1菌株を用いた。同株からは、林技セ構内の栽培試験で子実体が発生している。

*:中国の栽培種の1種。(岩手生物工学研究センター解析)

(2) 試験地

株式会社長根商店(九戸郡洋野町)の構内に、同町内産の黒色土を盛り、幅0.9m、奥行6m、高さ10cmの畝を2本立て、試験地とした(図1)。

(3) 栽培試験

供試菌株を林技セで培養して種菌を作成し、2021年11月に畝上に植菌した。植菌後は畝を黒色マルチシートと遮光資材で被覆し、無加温で散水等を適宜行った。畝の一方は2022年5月にマルチシートを銀色に変えた(銀マルチ区)。他方の畝は黒マルチ区とした。また、各畝中央の深さ3cmで地温を測定した。発生調査は2022年11月から2023年2月に掛けて月に1~2回、同3月は4回、それぞれ行った。

3 結果

接種約13カ月後の2022年12月に、銀マルチ区で子実体原基が確認された(図2、図3)。黒マルチ区での確認は、2023年3月だった。地温は銀マルチ区が黒マルチ区より高めに推移し、原基形成開始時の地温は銀マルチ区が10℃程度、黒マルチ区が5℃程度とみられた(図3)。これらの値は、林技セのハウスにおける試験結果の約5℃(成果速報No.372)と同程度か高かった。2023年3月には、原基の一部が子実体に生長した(図4)。2023年4月19日の子実体本数は、銀マルチ区が39本(7.2本/m²)、黒マルチ区が29本(5.3本/m²)であった。

4 おわりに

気象条件が栽培に適するとされた地域での露地栽培と、林技セ外での栽培に初めて成功した。今後は、2年目以降の発生を調査し、発生量増大や連年栽培を目指して研究を進める予定である。

【謝辞】 子実体をご提供いただいた皆様と、栽培技術をご指導いただいた雲南省高原特色農業産業研究所桂明英副院長、雲南農業大学馬嘯教授、中国科学院昆明植物研究所趙琪博士、他雲南省各位に感謝します。

(上席専門研究員 成松 眞樹)



図1. 試験地 (左:黒マルチ区; 右:銀マルチ区)



図2. 銀マルチ区の畝上に形成された子実体原基

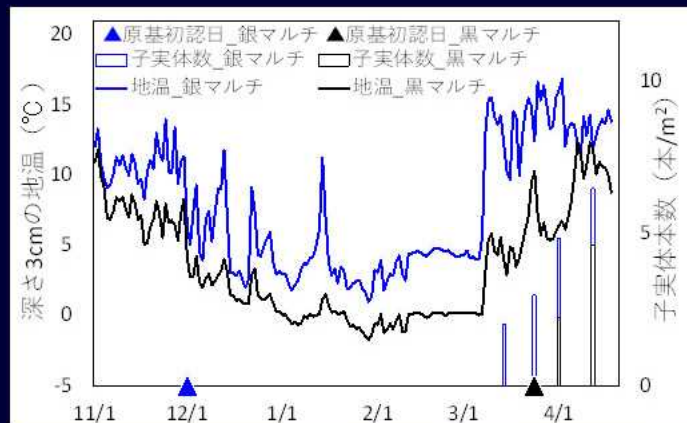


図3. 日平均地温と子実体発生数の推移(2022~2023年)



図4. 発生した子実体(黒マルチ区)

連絡先	028-3623 岩手県紫波郡矢巾町大字煙山第3地割560番地11	TEL 019-697-1536
	岩手県林業技術センター	FAX 019-697-1410
	ホームページアドレス https://www2.pref.iwate.jp/~hp1017/	